

トルーマン・カポーティ研究 (十)  
— 『遠い声 遠い部屋』を求める「人の心」—

片桐多恵子

Truman Capote Study (X)  
— 'The heart' searching for 'Other voices, Other rooms' —

Taeko KATAGIRI

研究紀要 第23号 別刷 (2022年3月)  
中部学院大学・中部学院大学短期大学部

*Reprinted from* THE JOURNAL of  
CHUBU GAKUIN UNIVERSITY, CHUBU GAKUIN COLLEGE  
No.23 : 1-11 (March 2022)  
SEKI, GIFU, JAPAN

# トルーマン・カポーティ研究 (十)

## — 『遠い声 遠い部屋』を求める「人の心」—

### Truman Capote Study (X)

#### — 'The heart' searching for 'other voices, other rooms' —

片桐多恵子  
Taeko KATAGIRI

抄録：『遠い声 遠い部屋』は、幻想的・怪奇的な閉ざされた世界を背景に、孤独な少年の内的成長がゴシック調で描かれている。この小説の主題を主人公のアイデンティティの観点から論じられることが多いが、わざわざ付されている題辞が主題を示しているとの新たな観点、即ち主題は「人の心」であるとの観点から考察した。また、ゴシックの世界を描き出す表現手法についても、今まで論じられていない次の二つの観点、即ち、物語の基調色としての「緑色が彩るアメリカン・ゴシックの世界」<sup>註1)</sup>と比喩表現による「内的ゴシック世界の表出」について論じた。

キーワード：人の心、色彩手法、比喩手法、題辞

## I はじめに

トルーマン・カポーティ(1924～1984)は幼い頃に両親が離婚し、叔母に預けられる。

叔母に可愛がられはしたが、親に見捨てられた孤独感は生涯にわたり彼の作品に影を落としていて、『遠い声 遠い部屋』も例外ではない。文壇にデビューした当時から“恐るべき子(an enfant terrible)”と言われて才能を認められていたが、19歳の時に書いた短編『ミリアム(Miriam)』でオー・ヘンリー賞を受賞以来、一層注目を集めるようになった。その後、『無頭の鷹』(1946)、『最後の扉を閉めろ』(1947)と、いずれもゴシックの色彩の強い短編である。その流れを汲み、2年の歳月を費やした処女長編『遠い声 遠い部屋』が1948年に出版された。性的な魔性を感じさせる少年カポーティの強烈なカヴァーの写真や、同棲している同性愛者ニュートン・アーヴィン(有名大学教授)への献辞など、作品の内容と共に出版早々から話題作となった。作品で描かれているのは「意識の辺境地帯であり、現実と幻想が区別し難く溶け合ってしまう主観世界であり、奇異な人々が彷徨する悪夢のような世界」<sup>26)</sup>である。

この小説に対して、出版当初は「ニューヨークの批評家の間での一般的見解は否定的だったが、なかには称賛に値する多くの価値を見出す批評家もあり、彼らはまるで別の本の批評をしているかのようである。・・・マンハッタン以外では、ほとんどの批評は称賛に終始した

(Although the prevailing opinion of the New York critics was negative, several found so much to praise that they seemed almost to have picked up a different title. . . . . Outside Manhattan, most reviews were admiring.)」<sup>3)</sup>。

日本では「華麗にして空虚な、ジャーナリズム好みの『若き天才の芸術品に過ぎない』」<sup>23)</sup>との批評もあるが、「カポーティの魔界の文学を確立することになった」<sup>10)</sup>等、大方の評価は高い。彼の魔界の文学の根底に流れるのは孤児の文学である。「カポーティ文学の本質は、見捨てられた、傷つきやすい『孤児』の文学なのである。両親に捨てられた子ども、周囲との違和感に悩む子ども、自分は誰にも愛されていないと思い悩む子ども—そうした孤独で疎外された『孤児』こそがカポーティの原イメージにある。」<sup>16)</sup>これらの評価を踏まえながらアメリカン・ゴシックの代表作の一つである『遠い声 遠い部屋』におけるカポーティの表現手法と主題について新たな視点で論ずる。

表現手法については、物語の基調色としての「緑色が彩るアメリカン・ゴシックの世界」と「比喩表現による内的ゴシック世界の表出」、また表現内容については、「題辞が示す主題‘人の心’の観点から考察する。

## II 表現手法

三島由紀夫は「ランディング邸へ到着するまでの3・4頁が圧巻である。この導入部に力が入りすぎている。

しかし小説の導入部としては、こんな見事な序曲はほとんど他に比肩するものがない。視覚は精密であらゆる物象がデフォルメされてみながら、しかも奇妙に正確な印象を興える<sup>20)</sup>と記している。

三島由紀夫のこの言葉は、この小説執筆へと突き動かされ憑かれたように序章を書き始めた時のカポーティを思い起こさせる。彼は子供の頃に幼馴染たちと遊んだ森の中を懐かしさに駆られ、一人で散歩している時に、「興奮状態——ある種の創造的陶酔状態——に襲われた(Excitement — a variety of creative coma — overcame me.)」のだった。その時の精神状態を次のように記している。

永続する稲妻の光が、有形のいわゆる現実世界を暗くし、突然見えてきた疑似創造の風景、人物や声や部屋や雰囲気や天候の息づく地域のみをあかるく照らし出すのである。そしてそれは、生まれてくるときは、怒り狂う虎の子どものようである。

a long sustained streak of lightning that darkens the tangible, so-called real world, and leaves illuminated only this suddenly seen pseudo-imaginary landscape, a terrain alive with figures, voices, rooms, atmospheres, weather. And all of it, at birth, is like an angry, wrathful tiger cub.<sup>35)</sup>

このようにして生まれてきた『遠い声 遠い部屋』である。彼が憑かれたように書いたヌーン・シティーまでの第1章には確かに力が入っていて、ボリュームは12章から成る小説全体の約20%を占めている。彼の表現手法の特徴も顕著に表れている。それを手がかりに、今まであまり論じられていない「色彩手法」によるゴシック小説の構築と「比喩手法」による表現の深まりについて論ずることとする。

## 1. 物語の基調色としての緑色が彩るアメリカン・ゴシックの世界

カポーティは聴覚的にも視覚的にも詩的文体に特徴があるが、『遠い声 遠い部屋』は取り分け色彩感覚の豊かさに溢れている。画家がキャンバスを彩るように、カポーティは丹念に小説の中の自然や物に色を付した。なかでも第1章は多様な色がプリズムのように散りばめられている。「薄暗い青鼠色の壁 (the somber bluegrey wall)」「朱に染まったマント (the cape dyed in vermilion)」「乾いた血のような錆色のインクで書かれた手紙 (the letter penned in ink he rusty color of dried blood)」など事物が不気味な意味を込めて彩られている。このように多くの色によってゴシック調が醸し出されているが、特に緑色は幾重にも塗り込まれ、どの章にも緑色が漂っている。

・・・蛍光を発する緑色の丸太が、黒い沼の水底に溺死体のように光っている (in the swamplike hollows・・・, there are luminous green logs that

shine under the dark marsh water like drowned corpses.)<sup>註2)</sup>

沼の底へズルズルと引っ張り込まれて、緑色の光を発しながら溺死体となって横たわっている人間の姿が浮かび上がってくる。このような表現によって、アメリカン・ゴシックとしての物語は幕を開ける。特徴的なのは「緑色」が、溺死体を想起させる丸太だけでなく、この物語の基調色として多くの物に丹念に付されていることである。

カポーティが「緑色」を用いた意図を知るためには、日本語の「緑色」と英語の 'green' のイメージや象徴性に相違があることについて触れておく必要がある。緑豊かな山々に囲まれている日本では、緑色は植物から「さわやかさ」「成長」が連想され、生命の躍動する色、若さの象徴でポジティブなイメージが強いが、英語ではネガティブなイメージが強い。英語の「green」には未熟 (inexperience), 不安 (fear), 嫉妬 (jealousy), 病 (sickness) などのイメージがある<sup>37)</sup>。これに関して、「嫉妬」のイメージを表す green-eye はシェークスピアの造語であり、「Green」がゲルマンの時代から「嫉妬」を意味することを知っていたことは、彼のたくいまれな才能と博学ぶりを証明している。<sup>22)</sup>と云える。そして『世界シンボル大事典』には、「緑色のイメージとして死や狂気<sup>2)</sup>」が記されている。

このように日本語の「緑色」よりも暗いイメージの多い英語の 'green' である。カポーティがどのように緑色を用いているかについて先ず第1章を概観することにする。先述の「溺死体を連想させる緑色の丸太」を筆頭に、多くの緑色が出現し、独特の雰囲気を醸し出している。例えば、孤児になってからの「ひびの入った緑色レンズの眼鏡をかけているような、・・・全てが現実感の無い日々を過ごす (as if he lived those months wearing a pair of spectacles with green, cracked lenses・・・ everything seemed to be something it wasn't)」ジョエルの処へ届いた差出人を父親に見せかけた偽の手紙は「緑色の薄い紙 (a green sheet of tissue-like paper)」である。喜び勇んで父親に会うための旅の途中のヌーン・シティーでは、夕闇がしのび寄る中で、深まりゆく緑の海が空に広がる (A sea of deeping green spread the sky)。街から目的地までの車に乗り込む頃には空は「溺れゆく緑の空 (the drowning green sky)」となっている。馬車に揺られ目的地スカリズ・ランディング邸 (頭蓋骨の上陸する邸の意) に着くころ寝入ってしまったジョエルは次のような夢を見る。

緑多き第1章を受けて「落ちてゆく・・・落ちてゆく・・・落ちてゆく・・・ナイフのように鋭い罅穴を・・・金属製の螺旋階段を、風車の羽根のようにくるくる回ってゆく。・・・鰐がぱっくり口を開けて待っている穴の底へ (falling... Falling... FALLING! a knifelike shaft・・・ he was spinning like a fan blade through metal spirals; at the

bottom a yawning jawed crocodile followed his downward whirl with hooded eyes.)」との強烈なゴシックのイメージの夢で第2章は始まる。

第2章で特筆すべきは、広い庭に立ちはだかる崖のように見える邸の壁の八つの窓全てが蔦によって緑色に限どられていることである。建物の「窓」は人間の「目」の比喩として用いられており、第4章の「緑色の目」へと続く。ジョエルは邸の窓を見上げた時に見た女の人の目を「鬼婆の目、北極の海の冷たい緑色の目 (wild witch-eyes, cold and green as the bottom of the North Pole sea.)」と表現している。この「緑の目」は「父親の目」の伏線でもある。第8章でのランドルフのペベに対する辛く激しい片思いの告白では「緑色」は血の色となる。彼は言う「孤独の芥をいっぱいにつめこみ、やがて臓腑が緑色に血を吐いて裂けるまで我々は悲鳴をあげながら世界中を駆け回り・・息を引き取る (with the garbage of loneliness stuffed down us until our guts burst bleeding green, we go screaming round the world, dying・・.)。彼からペベ宛の手紙の便箋は全て薄緑色である。薄緑色は死を表しており、書き続けるその手紙はペベの手許に届くことは無い。そして最終章の「溺れ池の緑の岸 (the green shores of Drowning Pond)」は第1章の「溺れゆく緑の空 (the drowning green sky)」に呼応して小説の中での緑の役目を終える。

## 2. 比喩表現による内的ゴシック世界の表出

この小説が「きわめて繊細なタッチで頹廢の雰囲気とゴシック性を絡み合わせた傑作<sup>9)</sup>と評価される表現手法の一つは比喩表現の効果である。この小説において「トルーマンは自分の少年時代を象徴と寓意を用いて書いた (Truman has written in symbol and allegory, the story of his boyhood.)」<sup>4)</sup>とジェラルド・クラークは述べているが、カポーティは実に多くの比喩表現を用いている。

ジョエルがスカリー・ランディング邸に住み始めたある日、庭から邸の窓を見上げる。そこには奇妙な女の姿があった。「庭の蝶々は羽根を動かすのをやめ、熊蜂も静まり返り、この女の不意の出現は庭じゅうに眠りを投げかけたように見えた (a butterfly ceased winking its wings, and rasping F of the bumblebees droned into nothing. Her sudden appearance seemed to throw a trance across the garden.)」。その女が窓から消えた時、ジョエルは、「はっと目が覚めたように後ずさりし、鐘につまずいた (reawaking, took a backward step and stumbled against the bell)」。この「庭じゅうに眠りを投げかけたように見えた」という活喩によって、庭の全てが催眠術にかけられたかのように一瞬にして眠りの静寂と化す情景が浮き彫りになる中で不思議な「女」の魔性が霧のように広がる。この女は物語の重要人物、女装をした性倒錯者のランドルフであることをジョエルはずっと後になって知る。女が静寂の中で急にカーテンの向こ

うに消えた瞬間、ジョエルは我に振り返らず後ずさりして鐘につまずく。その時、鐘が「しわがれひび割れた響きで、一つ、静けさをみじんに砕いて鳴り響いた (one raucous, cracked note rang out, shattering the hot stillness)」。静けさを微塵に砕く鐘の響きは、あたかも鐘に意図があるかのように活喩で語られるが、この鐘の音は紛れもなく弔鐘である。「幻覚と恐怖を絵画で表現したオディロンの作品『仮面が弔鐘を打ち鳴らす』に表現されているように、鐘は死への合図である」<sup>33)</sup>。つまずいたジョエルによって鐘が鳴り響いたことは、今後のジョエルの精神状態を暗示している。

別の日、同じ庭にジョエルは佇む。「風が川のように速く流れ、その流れに巻きこまれたざわめく葉は、大空の渚に波のような泡立ちを見せる。そして大地は徐々に黒く深い水底へと沈んで行くかに見えた。羊歯が海藻のようにゆれる。小屋が沈没したガリオン船さながら、朦朧と不気味に浮かび上がる (the wind moved swift as a river, the frenzied leaves, caught in its current, frothed like surf on the sky's shore. And slowly the land came to seem as though it were submerged in dark deep water. The fern undulated like sea-floor plants, the cabin loomed mysterious as a sunken galleon hulk.)」。このように邸の庭の樹の葉や羊歯が風に揺れる何気ない情景を、様々な直喩や隠喩を用いて独特の表現で描くことによって、あたかも邸が深い水底に沈んで行くようなゴシック的な不気味さを醸し出している。

そして父親の所在場所を聞いても誰も答えてくれない孤独なジョエルの心境は、隠喩「石」で表現されている。「どちらを見ても陰謀ばかり、ずっとだまされつづけ、父親も神様までが僕に悪意を。・・・どうすればよいのか分からない。一人ぼっちだった。腐った木の切り株に腰をかけた石の少年でしかないのだ (there was conspiracy abroad, even his father had a grudge against him, even God.・・・ Only he didn't know who or what to blame. He felt separated, without identity, a stone-boy mounted on the rotted stump.)」。信じる事が出来る人は誰一人居ない深い孤独の中で、一人だけ置き去りにされ凝り固まっている少年の心情を「石」で表している。

時を経てジョエルが少年から青年になりつつある様子には「彼の内部では一輪の花が開きつつあった (a flower was blooming inside him.)」とか、「小さなおたまじゃくしが、かえるになりかけてるのね (Little tadpole growing to be a frog)」といった寓喩を用いている。

さて、小鬼のように小さな黒人でジョエルを邸まで馬車に乗せた馭者でズーの祖父ジーザス フィーバーの葬儀の日、彼の心情が吐露される。「これほど厳粛な事件が起こっているというのに、大自然が何ひとつ反応していないのがジョエルには解せなかった。子猫の目のようなひどく青い空に綿の実のようにひらいた雲も、その美しいよそよそしさが憎らしい・・これほど狭い世の中に

百年以上も生きた人間（ジーザス）には、もっと高い敬意が払われてしかるべきだ（It seemed odd to Joel nature did not reflect so solemn an event ; flowers of cotton boll clouds within a sky as scandalously blue as kitten eyes were offensive in their sweet disrespect: a resident of over a hundred years in so narrow a world deserved higher homage.）」と直喩や活喩で語られている。比喩に使われている子猫は「いたいけない幼い純真さ」、青い空は「澄み切った広やかさ」、綿の実のような雲は「柔らかく人の心を包むような温かさ」の隠喩であるならば、そのような心根の人たちまでもが、彼の死に対してよそよそしいのかとの嘆きを読み取ることができる。亡くなった彼の名前は誰だろう Jesus（ジーザス）。二千年以上前に十字架上で死んだ Jesus Christ（イエスキリスト）の死に対しても世間は「よそよそしかった」ことと、カポーティは重ね合わせているのだろうか。

最後に、タイトルの一部に使われている「遠い部屋」は寓喩である。「遠い部屋」とは如何なる部屋なのか。ちなみに、日本語翻訳では「遠い部屋」と表現されているが、原著のタイトルには Other rooms となっており、本文中には a far-away room と other room が併用されている。本文の中の「部屋」に関する描写の中から4点を抽出し、「遠い部屋」とは如何なる部屋なのか考察を試みることにする。

(1) ジョエルは、「邸」でのランドルフ達との得体の知れない新しい環境に馴染めず「何とかして遠い遥かな部屋を見つけようとしていた（he tried with all his might to find the far-away room.）」、しかし「長きに亘って遠い遥かな部屋を探していたが、いつも見つけれなかった（Now for a long time he'd been unable to find the far-away room; always it had been difficult）」。

(2) ジョエルが好感を持った大魔術師のミスター・ミステリーは「ジョエルの遠い部屋への最も歓迎される訪問客となった（Mr. Mystery was the most welcome visitor to the other room.）」。

(3) 高慢ちきな上に生意気なアニー・ローズが、「この遠い遥かな部屋の中では、彼女のかわいい小さな声が、快い響きを奏でるのだった（here in the far-away room her cute little voice jingled on and on.）」。

(4) 隠者リトル・サンシャインは、恐ろしい奇怪な眺めの朽ちたホテルに今なお住み続ける理由を次のように述べる。「わしの正当な家なのだ。何故なら昔一度逃げ出したら、たちまち遠い声、遠い部屋が、失われ遠くかすんだ声が、わしの夢をかき乱したからだ（it was his right room, he said, for if he went away, as he had once upon a time, other voices, other rooms, voices lost and clouded strummed his dreams.）」。

これらから浮かび上がる「部屋」とは、遠い声、遠い部屋から呼び戻された「終の棲家」・「あるがままの自分になれる場所」・「心の休まる空間」であり、「その人

に最も適した居場所」であると考えられる。

これらの部屋と関係のあるジョエルの少年期からの成長は次のような寓喩で語られている。「彼の内部では1輪の花が開きつつあった。やがて堅く結んだ花卉がすっかりひろがり、青春の正午がひときわ赤々ともえさかるとき、彼もまた他の者たちのようにふり返り、他の扉の出口を探し求めるであろう（a flower was blooming inside him, and soon, when all tight leaves unfurled, when the noon of youth burned whitest, he would turn and look, as others had, for the opening of another door.）」。

すなわち「今は少年期で開花しつつあるが、すっかり開花したとき、即ち青年に成長した時、後ろ（過ぎし日）を感慨深く振り返り、新たな扉を開けて歩いていこう」との意味である。このように立ち止まって振り返るシーンは物語の最後にも出てくる。

「彼は庭の端でちょっと立ち止まっただけだった。彼はふとそこで、何か置き忘れてきたように足をとめ、茜色の消えた垂れ下がりつつある青さを、後に残してきた少年の姿を、もう一度振り返って見るのだった。（he paused only at the garden's edge where, as though he'd forgotten something, he stopped and looked back at the bloomless, descending blue, at the boy he had left behind.）」「後に残してきた少年の姿」とは少年ジョエルが過ごした日々であり、経験であり成長過程である。この物語は5月（春）に始まり、夏（青春）を過ぎ、10月（晩秋）に最終章を迎えるが、人生の一時期と重ね合わせている。少年期の描写において予言的に語られていたように、青年期になったジョエルは立ち止まって少年期を振り返る。予言的な言葉は「振り返った後、他の扉の出口を探し求めるだろう（look for the opening of another door）」と続いている。

ランドルフとの生活拠点からの出口を求めているようにも読み取れるが確かではない。ジョエルの今後は明らかにされないままに物語は終わる。新たな道を歩み出すのかランドルフの許へ行くのか研究者によって解釈が分かれるところである。「この小説の最後のシーンは、物語の集大成であるだけでなく要約でもある」<sup>29)</sup>とウィリアム・ナンスは述べているが、解釈の分かれるところである。大別すれば解釈は次の三通りである。

(1) ①ジョエルは、意識的に、そして能動的に、男色の世界へと足を踏み入れるのだ<sup>13)</sup>、②彼は自らの内にホモセクシャリティを是認し、ランドルフに身を委ねる決意を暗示する場面でこの物語は結末を迎える<sup>12)</sup>、③ Joel knows now that he “owned a room” at the Landing with Randolph.<sup>19)</sup> 等、ランドルフの招きに応じるとする解釈である。

(2) 「『ぼくはぼくなんだ』と、新しい出発をする」<sup>15)</sup>、「『ぼくはジョエルだ』という孤立感の認識を得て、スカリイズ・ランディング邸と少年であった世界を後にして、立ち去っていく」<sup>14)</sup> 等、ジョエルが新たな旅立ちをする

とする解釈である。

(3) “The ending of the story seems to be in question (物語の結末は謎のままに見える)”<sup>34)</sup>「これからどこへ連れ去られていくのだろうか。再びたちこみ始めた幻想の霧の中で物語は幕を閉じる」<sup>35)</sup>等、今後が不明のまま物語は終わるとする解釈などである。

いずれにせよ青春期を迎えて、ジョエルは遠い声 (other voices) が聞こえる遠い部屋 (other rooms), すなわち自分に適した居場所へと歩を進めるところで比喩に満ちた物語は幕を閉じる。

「比喩は意味よりも深く心に沁みる。比喩は心象風景の点描である。比喩は意識下の世界観」<sup>27)</sup>であることを実感させてくれる小説である。

### Ⅲ 題辞が示す小説の主題 ‘人の心’

題字を付すことの少ないカポーティが、この作品においては小説の冒頭に題辞を掲げている。旧約聖書エレミア書17章9節からの引用句である。題辞とは本の最初や各章の最初に置かれ、主題と深く関わる役割を果たす。

しかし、『遠い声 遠い部屋』の主題を題辞と関連させて論じている研究者は殆ど居ない。今までの主題の解釈を概観してみる。(1) John Aldridge に代表される「父親探し (The theme of the novel is a boy's search for a father)」<sup>1)</sup>とする説。(2) Ihab Hassan に代表される「自己の発見 (the discovery of the-Self)」<sup>9)</sup>とする説。(3)「アイデンティティ確立のため父親を探す子供の不安定な心理を描いた物語」<sup>30)</sup>, すなわち父親探しは自己のアイデンティティ探究の為であるとする説の三つにまとめることができる。

「自己の発見」や「アイデンティティ追求」が小説の中で大事なテーマであることは確かである。物語の中でジョエルは、ゴシック・ロマンスの雰囲気漂う大人の世界を見聞きし、奇怪な経験や孤独と思索の日々を過ごした後で、最後に「ぼくはぼくなのさ。ぼくはジョエル。ぼくたちはおなじ人間なんだよ」と喜びの声を挙げ、嬉しくて近くの木によじ登った時、「安らぎや開放感を覚え、自己のアイデンティティ認識に繋がる瞬間であった」<sup>32)</sup>この樹上におけるアイデンティティの発見は、カポーティが次に手掛けた小説『草の豎琴』の中心的題材にもなっていく。また、ジョエルは、今まで自分を支配していたランドルフが地面に「ただ円環を、その無価値のゼロを描く (describe a circle, the zero of his nothingness)」姿を木の上から眺めて、自分が誰であるかということ、自分が強いことに思い至り、自己認識をする姿が描かれている大事な場面である。しかし「自己の発見」や「アイデンティティ追求」が主題なら、敢えて題辞を付記する必要は無かったのではないだろうか。アイデンティティ追求の根底にある主題を示したくて題辞を付記したのであろうと推察する。よって先ず彼が題辞として選んだ旧

約聖書の聖句から小説の根底となる主題を紐解くこととする。

#### 1. 聖句が示す ‘人の心’

旧約聖書の原語はヘブライ語であるが、カポーティが用いた英語の聖書はKJV (the King James Version)<sup>31)</sup>である。その英文と共に日本語の聖書の訳文も参考にしながら考察を進めることにする。

以下、エレミア書17章9節の聖句の訳文の一覧である。

KJV: The heart is deceitful above all things, and desperately wicked. Who can know it?  
Jeremiah, 17: 9

文語訳：心は万物よりも偽る者にして甚だ悪し  
誰かこれを知るをえんや。

(KJVに最も近い訳文であり、この文語訳を河野一郎(訳者)は用いている。)

口語訳：心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。誰がこれを、よく知ることができようか。

聖書協会共同訳：心は何にも増して偽り、治ることもない。誰がこれを知りえようか。

新改訳2017：人の心は何よりもねじ曲がっている。それは癒しがたい。だれが、それを知り尽くすことができるだろうか。

バイリンガル聖書訳：人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう

なおR.K.ハリソンは『エレミア書、哀歌』<sup>31)</sup>の中で「再生されない人の性質は、神の恵みなしには絶望的な状態に置かれているのであって、そのことが9節の「それは直らない」(RSV「絶望的に腐敗している」、NEB「絶望的に病んでいる」と言う記述である」と述べている。<sup>34)</sup>

この聖句について北森嘉蔵は「聖書が‘心は’というような書き出しで書いている文章は決して多くなく、非常に珍しい箇所である。そして何を言うかと言うと、心はよろずのものより偽るものである。すなわち、心ほど悪質なものは世界にはないということで、それは心だけが偽ることをするというのである。この種の悪は人間の心だけがやるのであって、人間はそういう誘惑に始終襲われるわけである」<sup>17)</sup>と注解書で述べている。又、薦田崇志は「心について・・・その陰湿さが生々しく映し出されている。「とらえ難く」とはアコブ訳語で、「ゆがんだ」と言う意味の形容詞、単につかみどころがないのではなく、悪質なものでとらえ難いのである。また「病んでいる」も言語はアーヌシュという語で「不治の」という意味、単に病んでいるのではなく、治癒の余地がないほどに、と言う意味が含まれている。この二つの惨状を浮き彫りにさせるようにミ・コル(全てに増して)と付記されていて、その程度が致命的であることを描き出している。そして絶望的なことに人はそれを見極めることが

できない。」と説教黙想「エレミア書」で述べている。

「エレミア書」は、「イザヤ書」「エゼキエル書」と共に三大預言書の一書であるが、彼は「エレミア書」自体とは無関係に、この聖句を小説に必要としたと考えられる。『無頭の鷹』(1946)において題辞に用いた「ヨブ記」自体は無関係であったと同じく、「エレミア書」自体とは無関係に、この聖句の意味するところが『遠い声 遠い部屋』の主題に合致しているのが引用したのであろう。この聖句は人間の心(The heart)について述べている。よって、この小説を通してカポーティが最も描きたかったのは「人間の心」「人間というもの」だと考えられる。

## 2. 登場人物に描かれる‘人の心’

物語には多くの人々が登場するが、主なる人物達の心の動きにスポットを当てる。

まず、主人公ジョエル少年(13歳)に関して物語の進行と共に見てみよう。父親は行方知れず、母まで亡くして孤児となった主人公ジョエルは叔母に引き取られる。その彼の処に12年ぶりに父親からスカリイズ邸への招きの手紙が来る。叔母一家の「誰もが可愛がってくれる」と語っていたジョエルであるが、本心は手紙のお蔭で、「この家を出られることが嬉しかった。叔母のエレンも実はほっとしていることにジョエルは気がついてた。(He was glad to go. Joel could sense how relieved she was.)」つまり、ジョエルもエレンも本心を隠していたのである。叔母エレンの家で「送った日々は、あたかもヒビの入った緑色レンズの眼鏡をかけ、耳に詰め綿をして過ごしたようだった～すべては何か現実離れして見えた(It was as if he lived those months wearing a pair of spectacles with green, cracked lenses and had wax-plugging in his ears, for everything seemed to be something it wasn't.)」と彼の本心が記されている。寝室でエレンに『雪の女王』の物語を読んで貰いながら、自分が物語の主人公カイに似ていて「物の見方がすっかり歪められてしまう(it came to Joel that he had a lot in common with Little Kay, whose outlook was twisted.)」自分に気がつき繊細になっている。そしてスカリイズ邸に到着後の生活の中では、「母は凍死した」「僕はカナダで雪を見た」等と事実無根の話を度々周囲の人々にする。彼に対する相手の関心や興味を引きたいための嘘である。さらに邸でのランドルフ達との生活が続くにつれ、「感情を覆い隠すことが、彼にとっては自然な反射作用になりかかっていた(to obscure emotion was becoming for him a natural relax.)」。最初に預けられた叔母の家では、ヒビの割れた緑色の眼鏡をかけ、耳に綿を詰めたような毎日で、物の見方や考え方が歪んでしまうのではないかと子どもなりに心配しながら、嫌われまいと周囲に気を使って過ごしていた。ランディング邸に来てから、周りの人たちに面白おかしく事実無根の話をするのも相手の関心や好意を得たいためであった。ありのままの自

分を覆い隠すのが日常となっているジョエルであった。

次に、題辞の言うところの「偽りの多い」人間の心が随所に見られる人物ランドルフの言動を追ってみよう。彼はジョエルの父親と偽ってランディング邸への招きの手紙を出したところから彼の多くの偽りは始まる。その手紙は非常に格式高く、勿体ぶった文体で「当地ランディングにありては、美麗なる邸宅、並びに健康的なる食事に加わるに、文化的環境をそなえて、我が愛息をば遇すべきものにて有之候」と書かれていた。しかし実際に住んでみれば、手紙の文言にある美麗で健康的、文化的とは程遠い得体の知れない魑魅魍魎が跋扈する邸である。

ランディング邸の庭に居るジョエルに向って高い窓から肯いた「奇妙な女の人」について尋ねられると、ランドルフは「暑さのせいだね。幻を見たのだね(Heat. In minor hallucinations)」と知らないふりをする。実は、その奇妙な女性とは大舞踏会で伯爵夫人に女装して以来、「女になること」が心地良くなったランドルフ自身なのだが、女装の主が彼自身であることをジョエルには知らせないで不安と懐疑の心理状態のままに捨て置くのである。

さらにジョエルの父親のことも知らせない。孤児になった13才の少年にとって父親からの招きの手紙を手にした時の喜びは測り知れないものがあったことだろう。孤独に打ちひしがれていたジョエルであるが、自分を捨てたと思っていた父親から招きの手紙が来たのである。その父親に早く会いたいのは当然である。しかしランドルフは言葉を左右にし、なにかと誤魔化して会わせない。ある時、階段の上から階下の部屋に赤いボールが落ちて来る。ボールを落としている人物をジョエルに気づかれることを恐れてランドルフは非常に動揺する。ボールを落とす以外にコミュニケーションが取れない重度障害者がジョエルの父親(サムソン)であることを隠したためである。招きの手紙は父親が書いたのではないことことに気づかれたくないからであろう。

手紙に関しては、「邸」を出たくてエイミイに迎えを頼むジョエルがポストに投函した手紙を、密かに抜き取ってしまう陰湿な行動をするのは、ジョエルが邸から外へ出て行かないための策である。ランドルフ自身は「ひとたび外にただ一人で放り出されるや、ただ円を、無価値のゼロを描くより他にどうしようもない(once outside and alone, but describe a circle, the zero of his nothingness.)」のであった。

以上のジョエルとランドルフほど詳細に描かれてはいないが、その他の登場人物についても作者は題辞が語る「人の心」を多様に描いている。

ジョエルと近い年齢のフローラベルは、優等生で彼女の父親の自慢の娘である。彼女は上品に「妹のこと、悪く言うつもりはありませんのよ(I really don't want to sound mean about her)」と言いながらも、「かわいそう

にあの妹には良くない評判までたってますの (the poor child does have a reputation)」と告げる。心配するように見せかけて実は裏で陰口を叩く姉である。気持ちの悪い「邸」の様子についても、住み始めたばかりのジョエルに外部者として意味ありげ、下心ありげに、「にやにや笑いながら、身を乗り出してくるのであった (bending forward with a rather sly smirk)」。このような様子に、ジョエルは彼女について裏切りをする女だと見抜き、「裏切りほど許せないものはない (disloyalty was not part of his nature)」と強く思うのであった。一方、男勝りの妹のアイダベルは、裏表の無い娘に描かれている。ちなみにアイダベルはカポーティの幼馴染で作家となったハーバー・リーがモデルになっている<sup>7)</sup>。

重度障害者サムソンの世話をしているエイミイに関しては「空ろな上品さを装った、その魅力の無いベニヤ板の下では全く違った別の性格が、しきりと顔をのぞかせたがっているようだ (beneath the uningratiating veneer of fatuous refinement, another personality, quite different, was demanding attention.)」と二重人格者であることがほのめかされている。特に鼻の下にうっすら髭が生えている以外には風貌も性格も特徴無く、おとなしく見えるエイミイだが、不満を抱えている複雑な人間の心を持っている。

このように、人間という者は歪んだ心を偽ることが多く、その心は治るものではない事例の数々である。題辞が暗示する「人の心の深層部にあるものを喚起」<sup>5)</sup>し、普遍的な人間の姿の数々を写し出している。

### 3. ‘人の心’の本質

人間について特に考えさせられるのは、黒人女性のズーが遭遇した二度にわたるレイプ体験である。最初は彼女が14歳の時のことである。同じ邸に住む奉公人で今も投獄されている若い黒人による乱暴である。彼女の首には「細い傷跡が一本、紫の針金で出来た首飾りのように取り巻いている (A narrow scar circled her neck like a necklace of purple wire.)」。痛々しいその傷跡を、彼女は赤いリボンに巻いて隠していた。その赤は、生々しい血の色を連想させる。

痛ましいズーの喉を眺めさせられてしまったジョエルは「きっと彼女も僕と同じなんだ。きっと世間は、ズーに対しても悪意を抱いているんだ。・・・逃げ道なんてありゃしない。背筋を冷たいものが走り、頭の上では雷鳴が轟き、大地が身震いした (Maybe she was like him, and the world had a grudge against her, too. .... No chance whatever. None. A coldness went along his spine. Thunder boomed overhead. The earth shook.)」。このレイプ事件に対して空も大地も身震いをして轟く声を挙げたとの表現は、当時のアメリカの世相を映し出している。レイプが「南部アメリカにおける黒人女性とホモセクシャルに対する弾圧の手段であったことが、カ

ポーティの手によって描かれている」<sup>6)</sup>。カポーティは白人ではあるがホモ故に特別視(蔑視)されるマイノリティとして、白人社会の中で黒人故に蔑視される事に対して深い思いを込めてこの事件を描いている。事件後、黒人女性ズーは心身に傷を負いながらも明るく元気に成人し、高齢の父親の葬儀を済ませた後、長年の願望である清らかな白い雪の世界へとランディングから旅立つ。しかし彼女は旅立って間もなく白人・黒人含む肉欲盛んなトラック野郎たちにレイプされる。その時を回顧して彼女はジョエルに語る。

辱めを受ける最中に「あたいには、神様の声が聞こえた。お前は間違った道に来てしまった。・・・神様は、慰めを持って来て下さった。だから私は恥ずかしい苦しみの中真只中で聖句を口ずさんだの——たといわれ死の影を歩むとも禍害を恐れじ。なんじ我と共に在せばなり——天の神様は男の姿におなりになったので、私たちはしっかりと抱き合ったの」

I hear the Lord's voice. You done took the wrong road ... My Lord look down an brung comfort ... in all my shameful sufferin I said holy words: Yes, though I walk through the valley of the shadow of death, I'll fear no evil, for you is with me Lord, ... My Lord took that sailor boy's shape, an us, me an the Lord, us loved.

神様に抱かれたと語るズーだが、ランディング邸に戻って来た彼女の姿は、威厳を失い意気消沈し、以前の気丈で独立心旺盛な優雅さは失われていた。彼女は、襲われた時の様子をジョエルに語る内に、その時の幻影を追いつく無言劇を演じ始める。「キリストの悦びがその顔を狂わせ・・・悦びの苦悩が彼女の乳房を突き上げ・・・ (the joy of Jesus demented her face ... agonies of joy jerked at the breast ...)」無言劇は続く。

この一連のズーの無言劇の描写ほど読者を戸惑わせ、人間とは如何なる者かの問いを題辞と共に突きつけて来る箇所は無い。人間とは精神と肉体を持った生き物であり、外面と相反する内面や、理性では説明のつかない肉体的・性的反応を蔵する。肉欲も絡む状況下での「キリストの悦び」とは何を意味するのか。「悦びの苦悩」とはどんな苦悩なのか。ズーの祖父の名前に Jesus Fever とキリストの名前が使われているのを始め、聖書に関する文言が時折出て来る箇所でもある。「喉に剃刀による大傷を受けたズーのように、キリストが十字架の上で負った傷のように、カポーティの描く人物は皆、原罪を負っている」<sup>18)</sup>と Paul Revine は解釈している。原罪については、歴史的にもキリスト教界の教派の間でも様々な見解があり、ここでは触れることはしないが、「神は男(アダム)と女(イブ)を創られた」との聖書の言葉を重んじる性に対する当時の時代感覚の中で、自ら性倒

錯者であることを公言したカポーティ自身の、マイノリティとしての心情が垣間見える黒人女性ズーの描き方である。「カポーティは白と黒のカラーラインを超えて、一人の『個』として黒人たちを見ていたように思われる。彼に取って黒人を描くということは人間を描く事と等しかったのではないだろうか」<sup>39)</sup>

性に関しては、この小説が出版された1948年と時を同じくして「人間の男性の性の行動」が出版された。「9年間かけて約1万2千人のアメリカ男性にインタビューした、いわゆる、『キンゼイ報告書』として世界的に話題となった。その報告書では、これまでの「性」についての考えは、古い宗教観念にとらわれ科学的でなかったとされ、ユダヤ・キリスト教の伝統からの解放を求めている。」<sup>40)</sup>アメリカの性科学者・昆虫学者の著者 Alfred Kinsey は親から受けた厳格なキリスト教教育に反発していたとも言われているが、カポーティも当時のキリスト教に対して息苦しさや反撥を覚えていたであろうことは想像に難くない。

『遠い声 遠い部屋』は今日の読者が読めば、すぐに一人の孤独な少年がホモセクシャルという危険な世界にとらわれていく暗いエロスの小説だと読み取ることができるが、厳しいキリスト教界は勿論のこと一般には同性愛は解放されていなかった。しかしニューヨークでは既にゲイが社交界に「カミングアウト」しており、その中心の一人はトルーマン・カポーティであったと言われている。カポーティは色白で可愛い幼少期には親代わりの叔母が彼に女の子の洋服を着せて、両性具有のように育てられたこともあって、彼は自ら「私はアル中である。ヤク中である。ホモセクシュアルである。天才である」と公言していた。叔母に着せられた女兒用の衣類だけでなく、信仰についても心の根底の部分で、幼児期の体験がカポーティに影響を与えていることが次の問答から察せられる。

問い：「『遠い声 遠い部屋』のミゾーリはジョエルにこう尋ねます。「神のことを考える時、心をよぎるのはどんなことですか？」と。あなたの心をよぎるのはなんですか？」

答：神はどこにでもいるということ。神は誰の中にも居るといふことだ。子どものころ私は神を強く信じていた。それからまったく神を信じなくなった時期を経験した。私は生まれ変わったクリスチャンとはいえないが、神のところに帰ってきたとはいえる。

Q：Missouri, in *Other Voices, Other Rooms*, asks Joel: "When you think about the Lord, what is it passed in your mind? What passes in yours?"

A：The Lord is everywhere. The God is in everyone. I believe in God very much as a

child and then I went through a one period when I didn't believe in God at all. I'm not a newborn Christian, but I came back.

以上の対談<sup>41)</sup>から察するに、俗に言うクリスチャンとは程遠いが教会に行っていた幼児期の心が戻って来たということだろうか。今までになく信仰的な文言が散在しているのは確かである。しかしズーの無言劇の中での「キリストの悦び」「悦びの苦悩」なる表現を、キリスト自身や聖書と関連付けて神学の教義的解釈を試みる必要は無い。あくまでも肉体を持つ人間の姿、自分の意思でコントロールできない人間の心と身体を赤裸々に描いた一場面なのである。カポーティ自身の告白でもあり人間観でもある。「この職人(カポーティ)は不気味な雰囲気、誘い込むだけで、それ以外にわれわれに何を訴えようというのであろうか」<sup>24)</sup>との批評もあるが、この小説は、生きることに苦しみ「書くことと生きることが深いところでつながっていたカポーティ」<sup>25)</sup>が描いた人間の姿であり、題辞と重なり合う「人間の心」「人間というもの」を赤裸々に提示したのである。

#### IV おわりに

この小説の冒頭に掲げられている題辞は、旧約聖書「エレミア書」から引用されているが、三大預言書の一つである「エレミア書」そのものについては、カポーティは全く触れていないので、キリスト教の信仰と関連付けて論ずる必要は無い。この聖句をカポーティが題辞として選んだ理由は聖句の内容そのものにある。聖句は「人の心は、ねじ曲がっており偽り多く、悪に染まっており、病んでいて治しようもない。そのことを誰も分かっていない」と述べている。聖句が言うところの人間を描いたのが、この小説である。ランドルフを始め多くの登場人物が織りなす人間模様は、次々と人間の内面を露わにしていく。主人公の少年ジョエルは、それらの人々に関わりながら「人間」について実感として学び成長していくのである。

小説全体はゴシックの世界に覆われている。現実と幻想が境を超えて溶け合い、人間や自然、事物がデフォルメされている不気味な魔界の世界である。その魔界の世界の表現手法として際立っているのが色彩手法と比喩手法である。先ず色彩手法としては、基調色としての緑色が人の心の深部の不安、嘘偽りの多い怪奇的人間群像等の全体を覆っている。カポーティがgreenを付してゴシックの雰囲気を漂わせる手法は既に『無頭の鷹』(1946)において重要人物D.J.に用いている。彼女の目の色、レインコートや彼女の好物のポップコーンの袋にまで緑色を付して彼女の精神的異常さを明らかにしていく。しかし作品全体に緑を付してはいない。それから2年後の処女長編『遠い声 遠い部屋』においては第1章から最終

章の「溺れ池の緑の岸」に至るまでゴシック調の魔界の世界を緑色によって醸し出している。

以上の色彩手法と共に作品全体に用いられているのが比喩表現である。「小屋が沈没したガリオン船さながら朦朧と不気味に浮かび上がる」という分かりやすい直喩から活喩 (personification) や寓喩 (allegory) に至るまで多種類の比喩に満ちている。ちなみに「遠い声 遠い部屋」は「ほんとに伝えたいことを他のことがらにそっくり移しかえ、その移しかえたほうのことばを表に出すことによって、そこから、裏にあるほんとに伝えたいことを感じとらせる寓喩」<sup>27)</sup>であると解釈する。

比喩手法は題辭の抽象性を具体化し読者の想像力を掻き立て、人間の心について考えるのにも効果的であった。「ゴシック・ロマンス的色彩を秘めながら、そこに生きる人々の実存性と存在感」<sup>11)</sup>に比喩によって重みと深みをもたせたのである。カポーティは、人間の病的とも言える偽りや、内面的歪みを描くことによって、題辭が示している「人の心の根源的な有り様」を提示したのである。

註1 ゴシック小説とは、神秘的・幻想的な小説であり、どこか異常な非日常的でグロテスクな現実離れたことが展開される。ゴシック・ロマンスとも呼ばれる。アメリカン・ゴシックにおいては人間の内なるものの追求であり、その恐怖も肉体的・社会的恐怖というより心理的恐怖が主なるテーマである。(参考文献：八木敏雄 (1992) アメリカン・ゴシックの水脈。研究社出版、他)

註2 カポーティ『遠い声 遠い部屋』の日本語訳については河野一郎訳を使用した。

その理由について三島由紀夫氏の言葉を紹介しておく：「装幀は見事であり、翻譯はさらに見事である。あの妙なデリケートな文体を、ここまで明確な、味のある日本語に移した訳者の河野一郎氏に敬意を表する。」<sup>21)</sup>

註3 宗教改革期に現れたジェームス王 / 欽定訳聖書 (KJV) は1611年に出版され、3世紀近く長い間権威ある標準訳として用いられ、近代英語の形成と英文学に大きな影響を与えた。

註4 その後、根本的な改訂を目論んだ改訂標準訳聖書 (Revised Standard Version: RSV) がアメリカで編纂され評価も高くアメリカのプロテスタント教会では、KJV から RSV に切り替えられていった。RSV はイギリスでも読まれるようになったため、イギリスでも新しい翻譯の機運が高まり1970年に新英語聖書 (New English Bible: NEV) が発刊された。

## 引用文献

1) Aldridge John (1958) After the Lost Generation. New York McGraw-Hill, p.203

- 2) Jean Chevalier and Alain Gheerbrant. (1994) Dictionary of Symbols. 金光仁三郎他訳 (1996) 世界シンボル大事典. 大修館, p.953
- 3) Clark Gerald (1988) Capote, A biography. Ballantine Books, p.156 (中野圭一訳 (1999) カポーティ. 文芸春秋, pp.191, 192)
- 4) 同上, p.152
- 5) 江波杏子 (1969) ユリイカー特集カポーティ. 青土社, p.111
- 6) Fahy Thomas (2014) Understanding Truman Capote. The University of South Carolina Press, p.13
- 7) Garson Helen (1981) Truman Capote—A Study of the Short Fiction—. Twayne Publishers, P.94
- 8) Grobel Lawrence (1985) Conversation with Capote. New York; New American Library Books, p.224 (川本三郎訳 (1988) カポーティとの対話. 文芸春秋, p.316)
- 9) Hassan Ihab (1961) Radical Innocence. Princeton University Press, p.240
- 10) 今村楯夫 (1991) 現代アメリカ文学—青春の軌跡—. 研究社, p.138
- 11) 同上, p.141
- 12) 今村楯夫 (1994) 母への憧憬と離脱—『遠い声 遠い部屋』論—. 英米文学評論, 東京女子大学, p.35
- 13) 稲沢秀夫 (1970) トルーマン・カポーティ研究. 南雲堂, p.75
- 14) 岩元巖 (1974) 現代のアメリカ小説. 英潮社, p.132
- 15) 亀井俊介 (2000) アメリカ文学史. 南雲堂, p.143
- 16) 川本三郎 (1988) カポーティとの対話. 文芸春秋, p.361
- 17) 北森嘉蔵 (2008) エレミア書講話. 教文館, pp.161, 162
- 18) Levine Paul (1958) The revelation of the Broken Image. Virginia Quarterly Review, 34, p.84
- 19) Malin Irving (1962) New American Gothic. Southern Illinois University Press, p.81
- 20) 三島由紀夫 (1955) 亀は兎に追いつくか. 村山書店, pp.155, 156
- 21) 同上, p.156x
- 22) 三輪伸春 (2015) green-eye はなぜ嫉妬するのか：シェークスピアの語形成法解明の試み. 鹿児島大学, 地域政策科学研究, 13巻, p.98
- 23) 元田修一 (1978) アメリカ短編小説の研究—ニューゴシックの系譜—. 南雲堂, p.259
- 24) 同上, p.252
- 25) 両角千江子 (1977) 衰退と優しさの世界—『遠い声 遠い部屋』の—解釈. 東北アメリカ文学研究, p.49
- 26) 中道子 (1969) ユリイカ 特集カポーティ. 第21巻第5号, 青土社, p.202
- 27) 中村 明 (1978) 比喩表現辞典. 角川書店, p.2

- 28) 同上, pp.36,40,42.
- 29) Nance William (1997) *The World of Truman Capote*. Stein and Day, p.62
- 30) 小野寺吉三 (1968) *Other Voices Other Rooms* 試論—その幻想性と主題について—, 釧路工業高等専門学校紀要 2 巻号, p.139
- 31) R.K Harrison (1973) *Jeremiah and Lamentations*. Inter - Varsity Press, 富井悠夫訳 (2005) エレミア書, 哀歌. いのちのことば社, p.115
- 32) Reed Kenneth T (1981) *Truman Capote*. Twayne Publishers, p.124
- 33) 佐渡谷重信 (1988) ポーの冥界幻想. 国書刊行会, p.184
- 34) 土倉慎也 (2002) *Listening to the Voice I Other Voices, Other Rooms*. 岡山英語英米文学同人会, p.101
- 35) Truman Capote (1973) *The Dogs Bark*. Random House, pp.6,7. 小田島雄志訳 (1988) ローカル・カラー／観察記録—犬は吠える I—. 早川書房, p.21
- 36) 海野弘 (2005) *ホモセクシャルの世界史*. 文芸春秋, p.474
- 37) 矢田裕士 (1998) 日英語色彩語彙表現比較研究. 東京家政大学研究紀要1, 人文社会, 38巻, p.181
- 38) 山田健太郎 (1997) トルーマン・カポーティ「遠い声 遠い部屋」. 英米幻想文学, p.191
- 39) 柳澤真理 (2018) 遠い声を偲んで: *Other Voices, Other Rooms* におけるマイノリティへの親和性. 立教レビュー (47), 立教大学文学部英米文学専修, p.78

Truman Capote Study (X)  
— ‘The heart’ searching for ‘Other voices, Other rooms’ —

Taeko KATAGIRI

**Abstract** : In “Other Voices, Other Rooms” the international growth of a lonely boy is depicted in a gothic style against the background of a fantastic and bizarre closed world. The subject of this novel is often discussed from the perspective of the protagonist’s identity, but I have examined it from a new perspective in which the epigraph phrase which is deliberately attached, indicated the subject, that is, the “human heart”. In addition, the following two points of view, which have not been discussed before, were examined in terms of the method of expression used to depict the Gothic world. I discussed the “American Gothic world colored with green” as the key color of (note 1) and “the expression of the internal Gothic world” through metaphorical expressions.

**Keywords** : human heart, color technique, metaphorical technique, epigraph